

2022年12月

瓢鮎抄（一六八） 尾池和夫

逆断層越え小春日の大和路へ
採石跡白じろとあり冬の月
法堂を遠く近くに冬の鴟
比叡のみお山と呼ぶよ冬紅葉
冬霧の花折峠越え来る
苔庭に一輪落つる冬椿
蟠竜のにらみ下ろせる冬座敷
老僧の説法に暮れ時雨かな

真新しき献酒の樽や朴落葉
波くづれ波現はるる神の留守
冬ざれや鷺の猫背のますますに
雨あしに揺るぐことなし枇杷の花
くつさめの追ひかけて来る地下の駅
落葉蹴散らして速達届きけり
鳥柱ととのひ冬の日暮れくる
夫の手を離し焚火にかざしけり
おはやうと冬の泉を汲む列に
新雪をかづきし棟の鬼瓦

2022年11月

瓢鮎抄（一六七） 尾池和夫

筏師の技伝承に秋の山
発電所取り巻く風車いわし雲
開け閉めの戸に鹿垣の柚の家
黒曜石見つけし沢や秋の蝶
さがり目の羅漢像なり里の秋
新蕎麦に紅葉の素揚げ添へにけり
秋深し木のこゑのある木の根道
山麓に寺跡あるのみ櫟の実

椎拾ふ馬頭観音像の脇
こゑ真似てしぐさ学ぶよ在祭

蟋蟀の五匹鳴くらし露天風呂
日課にも得手不得手ありとろろ汁
秋刀魚食ふ老眼鏡にかけかへて
夜長なり小銭数へるたび変る
千の手に千の仏に冬きざす
雉鳩のよく鳴く街や冬に入る
門前を掃けど掃けども落葉急
群発地震なほ続く能登の冬

2022年10月

瓢鮎抄（一六六） 尾池和夫

初秋の木の椅子硬し連れを待つ
在来線乗つとるがごと葛の花
降りさうな空をみあぐるをとこへし
雨に色増しし紫式部の実
やぶがらし遠慮知らずよ斜張橋
吊橋を行き交ひ秋の初嵐
吊橋の揺れ身のうちに秋の雲
秋分の川幅広き橋渡り

鶺鴒に先導されて川の辺に
牧ノ原台地端つこ秋桜
茶畑のすき間にでんと大南瓜
巫女たちの裾からげゆく野分だつ
御朱印を濡らさぬやうに霧の中
境内に小流れあまた野分去る
空に動きなき台風の逸れたるは
大崩海岸そこに秋の波
磯蟹のすばやく隠れ出るを待つ
空高し荒磯そこここ忘れ潮

2022年9月

瓢鮎抄（一六五） 尾池和夫

上富良野ゲリラ雷雨を走り抜け
雷光や富良野の起伏うき立ちぬ

落雷の近し耳目の刻止る
眼力の張り付くごとし霹靂神
いかづちや眼光据うる刻忘れ
雷鳴の美瑛の丘や地図開き
雷雨激し美瑛の起伏ただ走り
径の端に繁茂山吹升麻かな

然別湖へ峠を越ゆる夕立かな
然別火山群なり夏の雲
イグルー村できる湖いま晩夏
毛虫這ふ五千万年ひとまたぎ
一億年の地層一気に夏の蝶
それぞれの地層それぞれ青葡萄
地層より毛虫に夢中なる人も
旧道庁工事中なり夏の朝
赤信号迷彩めきぬ木下闇
植物園の塀をはみ出し山法師

2022年8月

瓢鮎抄（一六四） 尾池和夫

なぜに富士の周りのみなる夏の雲
機内誌に古希の特集氷水
牧草刈る一直線の乱れなく
密集のビート畑や炎天下
プラットホーム桑の実へ手を伸ばし
二歳馬の出走待たれ夏の雲
熱砂蹴る疲れや輓曳競馬果つ
砂煙あげたる数の馬冷す

落葉松の防風林も真夏日に
十勝岳へ畝まつすぐや大豆植う
農場主五代目なりとハンモック
馬鈴薯の花やこの地は薯とのみ
蝶鮫の水槽生まれ日の盛
鹿追の地名アイヌ語夕焼雲
山火事のありし繁りや夏の雨
搾乳の牛行儀よき夏盛ん

炎天や乳牛はいま昼休
遠雷の鐘の鳴る丘ラベンダー

2022年7月

瓢鮎抄（一六三） 尾池和夫

新緑のほどよく揺るる窓の外
ジャスミンの花絡みつく裏鬼門
新緑は桂の重ね軽井沢
葉桜の小さき葉を選び吹き鳴らす
母の日や親子の気質似て非なる
新幹線はこの山中ぞ藤の花
老鶯のこゑを待ちをり夜の明るる
薩埵峠見上ぐるのみに夏の空

国境無き太古に戻れ雨蛙
我が余命幾ばくなりや竹の花
つぶやきは本音にあらず若葉風
再生医科学研究所前松の芯
木苺の広がり止るすべのなく
富士川も富士も隠して梅雨滂沱
梅雨激しハイビスカスは花を閉ぢ
大声の酒屋のあるじ梅雨滂沱
花崗岩の巨石五輪や苔の花
小國社の神木蚊母樹の花と

2022年6月

瓢鮎抄（一六二） 尾池和夫

茶畑へ続く山なみ霞みけり
桜蝦由比の浜いま朝日和
蒲原のここだくの漁桜蝦
春風や御位牌天武天皇と
真上より見れば猫の眼草と知り
米蔵の鼠返しよ春の塵
田起しもすべて人力登呂遺跡
藁屋根へ白詰草の割込みぬ

「子育て中」と床に貼紙燕の巢
たちまちに諸手ふさがる蕨かな
仏前に濃き緑なす高野槇
横長の田下駄に身動きのならず
復元の火鑽白なり初夏の風
葉桜や疏水に小さき渦多し
葉桜や高野町内高野山
五月闇織田家に並ぶ豊臣家
風に揺るる舞妓の帯や薄暑光
六月や晴れて舞妓になられしと

2022年5月

瓢鮎抄（一六一） 尾池和夫

小学校跡に根付きぬ花大根
黒文字の花や小雨の愛宕道
清水港見おろす寺や牡丹の芽
六地藏尊は海向き擬宝珠の芽
跨線橋沿ひに木通の花盛り
清見関跡の地かつて海や春
戦争はすべて虚となれ春の海
暁の夢に屋根打つ春の雨
桜咲くかつて焼土の駿府にも
花屑をていねいに掃き出勤す
交番の裏へまはりし花筏
桜井戸や名残の桜散り急ぐ
静岡へ発つとき京の黄砂濃し
晩春の朝逆光の近江富士
愛知川を渡り車窓の麦の秋
暁暗の近江平野よ麦の秋
はやばやと濃尾平野に初夏の風
新緑の駿河の朝に下り立ちぬ

2022年04月

瓢鮎抄（一六〇） 尾池和夫

露の臺かつて坑夫の歩きたる
伝承のマタギの径や露の臺
谷筋を描き出したたり春の雪
春の草春の浅瀬を流れ行く
水音に水を重ねて山葵沢
去り際の未練をことに蕨採
春筍や完なき源氏物語
投げ釣の狙ひ眼張にさだめたり

山茱萸の花影もまた黄のありぬ
蒲公英の道たどりゆき忍野村
うららかや忍野八海よりの富士
国道より富士の見えぬる梅真白
富士山をくるむがごとし春の雲
富士見橋に富士の見えざる霞かな
独りなる朝もまたよし春の雪
多様性とは水仙の花の向き
信長公廟の白梅三分咲き
足休まずと止り木に春の宵

2022年03月

瓢鮎抄（一五九） 尾池和夫

石垣の石の遊びに春兆す
梅が香やビルの谷間の昼休み
春風や京に西山東山
明日あると思へど遅寝二月尽
大文字山の大的字春めける
片隅の一輪挿しの黄水仙
教会の鐘かすかなり朝寝中
春光やキリシタン墓碑一列に

啓蟄や聖母子十五玄義の図
静かすぎるよ啓蟄の朝の雨
春の塵払ふ額装マリアの図
草餅の旗はたはたと栗田口
枝振りの相あきらかに春の雪
三井寺より湖面の見ゆる春の月

玉三郎昆劇を舞ふ木の芽時
俄雨たちまち目立つ柳の芽
青空がいちばん似合ふ土佐水木
霾るや楼蘭のこと論文に

2022年02月

瓢鮎抄（一五八） 尾池和夫

雲重く彦根は雪の深き町
雪雲の切れ飛ぶ養老断層へ
新年の日矢のまつすぐ港町
比良山に雪雲の乗る二日かな
貝殻の絵馬奉納の三日かな
冬空へ威風立ちなり硯石
里山を隠す吹雪となりにけり
冬の空広げ空師の着地かな

氏神のかつての記憶冬紅葉
新海苔や海の生物多様性
奥山は我が水源よ落葉踏む
薬草と看板大き冬の邑
本堂へ郵便配達冬紅葉
切株に立ち上がりたる冬椿
人はみな赤子たりしと鯨汁
研究会納や猪の鍋の湯気
孤立なる富士は堂々冬景色
浚渫の琵琶湖疏水に寒鴉

2022年01月号

瓢鮎抄（一五七） 尾池和夫

戻り鰹炎の位置が決め手なり
一里塚集合の子ら榎の実
香りほのと桂落葉のあたりかな
遠目する富士に雪なし十二月
名誉教授称号授け小春かな
橡の実や巨木に挑む樵の背

伐り活かす木樵の斧や小春風
小春日や年輪叩き木樵笑む

こゑあげし鴨編隊の列くづす
流れいま逆転したり冬の汐
土佐言葉飛び交ひ七五三祝
竜神を祀る池面へ散る銀杏
道真のご神歌揃ひ石露の花
落葉踏み幼きころの道たどる
銀杏散る板垣退助生まれし地
崩落の崖の上なる子守柿
ジグザグに登りつめたる子守柿
駅ごとに柿たわわなる土讃線